



平成25年度の自然学校を振り返って Part 2

前回の13号は、実施報告書からの先生方の意見を中心に掲載しましたが、今回は「活動状況」に絞って、平成25年度の本校での自然学校を振り返ってみます。

下図は、過去2年間の利用校の活動状況について、全ての利用校が実施する入校式と退校式を除いた上位20位までの活動をまとめたものです。なお、活動率(%)は活動数÷実施グループ数×100で算出しています。

H25年度 53グループ68校		
活動名	活動数	活動率
スタンプ練習	57	108
野外炊事・昼食	52	98
キャンプファイヤー	51	96
手紙書き・家族への手紙	49	92
交流会(リーダー・他校等)	37	70
施設散策OL	34	64
火おこし	33	62
クラフト(木エ・竹)	33	62
隠れ家づくり	29	55
竹田城跡登山(ハイキング)	24	45
ナイトハイク	19	36
星空観察・天体観測	17	32
フリータイム	16	30
漕艇体験(県立円山川公苑)	15	28
焼き板(絵付け・磨きを含む)	15	28
林業体験(伐採・枝打ち)	13	25
朝来山登山	13	25
ふり返り活動	12	23
ひのきーホルダー	11	21
野外炊事・カートドック	11	21

H24年度 47グループ62校		
活動名	活動数	活動率
スタンプ練習	55	117
野外炊事・昼食	54	115
キャンプファイヤー	44	94
火おこし	38	81
施設散策OL	38	81
手紙書き	26	55
交流会(リーダー・他校等)	25	53
隠れ家づくり	23	49
漕艇体験(県立円山川公苑)	21	45
ナイトハイク	18	38
竹田城跡登山(ハイキング)	17	36
フリータイム	16	34
星空観察・天体観測	16	34
朝来山登山(早朝)	15	32
朝来山登山	12	26
手紙書き(はがき書き)	12	26
ひのきーホルダー	11	23
テント泊	11	23
焼き板(絵付け・磨きを含む)	11	23
クラフト	10	21

利用校、担当者および児童の実態が違い、また、同じ学校であっても、実施時期が大きく異なり、季節に応じた活動を取り入れている学校もあるので、一概に比較できないかもしれません。しかし、前年度の踏襲になっている学校も多くあり、スタンプ練習、野外炊事・昼食、キャンプファイヤーが、昨年度と同様に上位3位までを締めています。

今年度、昨年度までほとんどなかった林業体験(伐採・枝打ち)が、13グループ15校において実施されました。それぞれの主な活動を集約すると、下記の4パターンにまとめられます。

	伐採体験のねらい	プログラムの流れ
1	木(竹)伐採及びクラフト、野外炊事を通して、木・竹の性質、有用性を理解する。	木伐採→野外炊事の燃料として使用→木エクラフト 竹伐採→竹食器づくり→野外炊事で使用
2	木伐採を通して、実感を伴った理解を図り、科学的、数学的な見方や考え方を養うとともに、木伐採及びクラフト、野外炊事を通して、木の性質、有用性を理解する。	木の年輪、高さを予想し、伐採し確かめる。→野外炊事の燃料として使用→木エクラフト
3	木伐採後のグループワークを通して言語活動の充実を図るとともに事後の教育活動の充実を図る。	木伐採→グループワーク(1本の木から何を作るか考える。設計図づくり)→木エクラフト(グループごとの共同作品)
4	竹を伐採し、その竹を活動の中ですべて有効に使い切ることで、竹の性質、有用性を理解する。	竹伐採→竹クラフト・竹筒飯盒・竹バームクーヘン等→野外炊事とキャンプファイヤーの燃料として使用

11号でも紹介した明石市立清水小学校のように選択活動や半数の児童で取り組んだのが3グループで、他の10グループが全児童を対象に木や竹の伐採体験を行いました。ヒノキやマツ、スギなどの



木を伐採したのが6グループで、他の7グループが竹の伐採です。木や竹を使ったクラフトは、昨年度も多くの学校が取り入れられていました。しかし、材料となる木や竹は、業者から購入したり本校職員が伐採した木や今までの学校が使った余ったものを利用したりするなど、クラフト材料が与えられる受動的な学習でした。それが、木や竹を伐採してクラフト材料を生み出す能動的、主体的な学習へと大きく変わっていったのです。

また、平成19年度に自然学校評価検証委員会から提言された「自然学校の一層の充実を図るための『6つの方策』」の一つである「自然学校と他の教育活動との連携を図る取組の充実」についても、大きな変化があったと言えます。それは、今までは事前に各教科等で学んだ知識・技能等を生かす・発展する場が「自然学校」であったり、自然学校を通して学んだ探求的・実践的な態度や感性等の成果を生かす場が、事後の「各教科、総合的な学習の時間等」であったりしたのが、事前の知識をもとに「自然学校実施期間中」に生かし、そこで得た知識を今後の学習や生活に生かそうとしている活動に取り組んだ学校がありました。具体的には、木伐採体験を通して実感を伴った理解を図り、①木の高さを予想する算数科の学習として、数学的な見方や考え方を養ったり、②木の年輪を確かめる理科の学習として、科学的な見方や考え方を養ったりするなどの実践例がありました。小学校学習指導要領の算数や理科の目標を達成する手段として、適切な体験活動であると言えます。



その上、木（竹）伐採体験は、その後の活動につなげられるという利点があります。伐採した木や竹は、竹ばしやスプーン等の野外炊事の食器材料、野外炊事時の焚きつけ燃料としての端材、また、クラフト材料等になり、5日間の連続性のあるプログラムの導入部分として位置づけることができます。

6月末に、2学期利用28校（連合小学校は担当校）に対して、「木・竹伐採体験活動に関する事前調査」を実施しました。その結果、6校が「計画している」、16校が「計画していない」、6校が「未

木・竹伐採体験活動を計画しない理由	校数
自然学校のねらいにあわない	2
体験を取り入れる時間がない	7
児童数が多く、実施不可能と思う	3
初めての活動で、イメージがわからない	3
とても危険である	1
何をどのように指導したらいいのか、わからない	0
その他	3

定」と回答がありました。左の表は、木・竹伐採体験活動を計画していない16校に、その理由を聞いてまとめたものです（重複回答可）。時間的な問題や児童数の多さ、初めての活動での不安が多くを占めていました。その他として、「暑さの厳しい時期である」、「里山体験で実施済み」、「待つ時間が長い」という理由がありました。危険性や指導方法につい

での不安さから、計画していない学校（担当者）が少なかったのは、自然学校で子どもたちを受け入れる施設として、心強い限りです。また、木・竹伐採体験活動を取り入れてもらうにあたり、助言しやすいとも言えます。イメージがわからないと回答された学校（担当者）に対しても、指導課だよりや機関誌『どんぐり』で、少しは様子が分かってもらえたものだと思っています。来年度は、今年度以上に多くの学校が、この活動に取り組み、新たなプログラムになることを期待しています。

編集後記

職員作業で、チェーンソーを用いて木を切り倒す時があります。木が倒れる瞬間、言葉に表すことができない快感があります。のこぎりで木を切り倒す子どもたちにも、この気持ちを伝えたく、今回の「指導課だより」を作成しました。

（文責 主任指導主事兼指導課長 北條 勝也）